



ア
メ
リ
カ
童
話
か
ら

8

松 原 至 大

うそを言わない兎うそま

ヴァレンタイン祭(三世紀頃のローマのえらい坊さんのお祭り日、二月十四日)の朝早くでありません。お母さん兎のコットンテールさんが、いつもの明るい元氣な顔をして、子供のスクーター君とスーちゃんを呼びました。「もう起きる時間ですよ。」

牝鶏めんどりのレッドさんの聲がしましたよ。

ベッドからとび出して早くお支度。

のろろしてはいけません。」

スクーター君とスーちゃんは、ベッドからとび出して、服をつけました。あんまり急いだったので、スクーター君は小さな赤いコートを裏がえしに、スーちゃんはかわいいブルーのドレスを横つちよに着ました。二匹はお臺所へとんで行くと、スーちゃんはお母さんの大きな白いエプロンをひつばつて言いました。

「お母さん、どうぞお願ひよ。」

わたしたちのお服をなおしてちょうだい。

お兄ちゃんはボタンにとどかないし、

わたしは蝶結びが見つからないの。」

お母さん兎は笑つて、なおして下さいました。それから朝のお食事に、コーンミールのはいつた大きなボールを、二匹に下さいました。食べてしまうと、スクーター君はおいすからとびおりて言いました。

「ぼくたち今週は、外に出なかつたね。外へ出て、かくれんぼしないかい？」

お母さん兎はうなづいて、二匹にスウェーターを着せて、手袋をつけて下さいました。そして言うのには——

「いつもおいたをしないで、

教えられたとおりにするのですよ。

そうすれば困つたことにもならないし、

お母さんにしかられもしませんよ。

ワシントンさんが子供だつた時は、

決してうそは言いませんでしたよ。

櫻の木を切つた時にも、

「お父さん、ぼくです。」と言いました。

だからいつもほんとのことを言えば、

あなた方もそのようになれますよ。

スクーターちゃんときーちゃん、

大きくなつたら、わかりますよ。」

こう言つて兎のお母さんは二匹をしつかり抱きました。それから二匹は遊びに出かけたのでした。間もなく一本の木のところきました。一番下の大枝の上に、袋ねずみのピーター君が眠っていました。とに角、眠っているように見えましたが、でも皆さんが知つてるとおり、袋ねずみは眠つたふりをする動物です。この時もスクーター君ときーちゃんが木の下のきたのに目ばたき一つしませんでした。スクーター君は小枝をひろつて、ピーター君に投げつけました。

「うん。」と、袋ねずみはうなづいて、目を一つあけました。

「失禮だよ、君、

おとなしいものをびつくりさせるのは。」

そしてはげしく足を踏みつけたので、木の皮をはがして、それがスクーターちゃんの小さな鼻の先にあたりました。

「いたい。」と、スクーター君が叫ぶと、二匹は逃げ出しました。

「袋むすみのピーターちゃんは、
今日とはんがり御きげんよ。」

「もう帰つた方がいいわ。
わたしたち、お家から遠くなつてよ。」

「お母さんがお喜びにならないわ。
わたしたちがこんなところにては。」

けれど、スクーター君は笑うだけでした。その白い尾が、小道を走つて行くと、上になつたり下になつたりして見ました。スーちゃんも、少しの間、兄さんを見ていました。そして、その後につづいてかけ出しました。ひとりで歸つては、道にまようかもしれないのがこわかつたのでした。とうとう二匹は、お百姓のブラウンさんの納屋なだにきました。「納屋の中にはいろいろよ。
なにがあるのか見ようよ。」

「だれかいたら、
逃げてかくればよいから。」

スーちゃんが、スクーター君の言葉を聞いた時は、入口のところに来ていて、中をのぞいているのでした。二匹は見まわしました。だが目にはいつたものは、大きなわらの積み重ねばかりでした。わらの間をはねまわるのは、面白かろうと思ひました。そこで二匹は、大きなジャンプをして、そのまん中にとびこみました。さて、どんな面白いことがあつたのでしょうか。大ジャンプをしたスーちゃんは、不意にそのかわいいお白粉おしろいの PAP のような尾を、くぎにひつかけてしまいました。スクーター君がふりかえつて、ひつかかつているのを見ると、とびよつてきて、叫びました。

「ああ、これは大へんだ。
どうしたらよいのだろう？」

「けがをしたろう、スーちゃん？」
スーちゃんは泣いて、うなづきました。スクーター君は、あたりを見まわしましたが、スーちゃんの足臺になるものが見あたりません。そこで、ふと思ひついて、叫びました。

「ぼく、そこへわらを持つてきて、

高く、深く、ひろく積み上げよう。

それから君の尾をひつばらう。

そしてそろつと、くぎからはずそうよ。」

そこでスクーター君は、一生懸命にわらを積み上げました。それを前足でかいて、後足でかためました。スーちゃんの足臺になるまでかたくしつかりと。スーちゃんはその上にとると、尾の先をはずして、くぎからはずせました。

二匹がお家へ着くと、スクーター君はお母さんのところへかけて行つて、叫びました。

お母さん、ぼくはうそがつけません。

スーちゃんを泣かせたのは、ぼくですよ。

ぼくが、納屋かやなんかに行かなかつたら、

けがはしませんでした。

ぼく、とても悪いことをしました。

おしりをたたいて下さい。」

やがてスクーターはうなだれて、二つの大きな涙の川が、そのやわらかな毛に覆われた小さな鼻から、走り落ちました。スーちゃんは、小さなハンカチーフを出して、それをふいてあげました。お母さん兎は二匹を腕の中に、しっかりと抱いて、お臺所のストーヴの側にすわりました。

やがてお母さんは、二匹をしずかにゆり動かしながらうたいました。

「あなたが、ほんとうのことを

おつしやつたのがうれしいのよ。

いつかね、だんだんにね、

あなたがスクーター・ワシントンとなつて

みんなにいられますよ。

うそをつかないスクーターさんと。」

(ルース・ラインド・キルバーン女史の作から)